NEW あしながファミリー

172号
2021年（令和3年）
11月18日
編集責任者　玉井　義臣

一般財団法人 あしなが育英会　TEL (03) 3221-0888
〒102-8639　東京都千代田区平河町2-7-5　砂防会館本館4階

あしながさん大特集

大学奨学生が保護者にインタビュー　（2・3面）
あしながさんからの手紙　（4～9面）
あしながさん調査結果報告　（13～15面）
副田義也名誉顧問追悼　（18・19面）

1週間に1冊以上本を読む読書好きな凛花子さん。自分の詩が載った絵はがきを手に持って

何かに迷ったら空を見上げてみよう
つながる空の下で
きっとあしながさんがみていてくれる
未来への道のりは長くゴールは遠くても
一歩一歩楽しみながら進んでいこう
一緒に歩いてくれる
一緒に喜んでくれる
あしながさんの大きな愛情に感謝しながら
「ありがとう」と声にしてみよう
見上げた空は澄んでいるはずだから

石橋（いしばし）　凛花子（りかこ）さん（18）

福岡県・高校3年

いつもそっと支えてくださるあしながさんへ、奨学生から季節のご挨拶を毎年お送りしています。高校奨学生から寄せられた詩と「あしながさん」カラーイラストをあしらった絵ハガキに、奨学生が学校での様子、将来の目標、あしながさんへの感謝の気持ちを1枚1枚に手書きでしたためています。遺児とあしながさんの心の交流の象徴ともいえる絵ハガキです。

今年の残暑見舞いには、石橋凛花子さんの詩が採用されました。この詩には凛花子さんのあしながさんへの強い想いが込められています。

「ありがとう」を胸に進む医師への道

大学受験を控えた凛花子さんは、凛花子さんが物心ついたときから車いすで生活をしている父の進一さん（47）と、父を支えながら働く母の正子さん（51）、そして同じく受験生で中学3年生の妹・紺花子（かなこ）さんと暮らす4人家族。

医学部合格に向けて猛勉強中の凛花子さんは、平日は18時まで学校で課外授業に励み、自宅に帰ってからも4時間以上勉強をしている。そんな凛花子さんが医師を目指したきっかけは、反射性交感神経性萎縮症で両下肢が不自由な父の存在だ。

治療法がないうえに患者の数も少なく、難病にも指定されていない。車いす生活を余儀なくされている父の姿を見て、「同じような状況の人たちを手助けする医師になりたい」と思うようになった。

幼稚園の時から医師の夢を追い続けている凛花子さんは、幼い頃から読書好きで、たくさんの本に囲まれてきた。その中でも特にボロボロになるまで読み込んでいたのが、人体図鑑だった。その知識は、生物基礎や保健はテスト前に勉強をしなくても高い点数が取れるほど。「友だちや妹にはオタクみたいだと言われたりもするけど」と、はにかんで話す姿は、それまで大人びた印象だった凛花子さんが、高校生らしい表情をのぞかせた瞬間だった。

恩師との出会い

凛花子さんが「患者の役に立つ医師になりたい」と思った理由の一つには、父を診てくれていた麻酔科の医師との出会いがあった。

小学2年生の時に、課題の一環でその医師にインタビューをした。その時、「痛みというのは物理的な痛みもあるけれど、精神的な痛みもあるんだよ」という言葉を聞き、「病気を治すだけでなく、患者の心をプラスに変える手伝いがしたい」と、強く思ったという。

今では医師になるための道を教え導いてくれる、恩師のような存在になったその医師。「私は、自分を取り巻く環境を嫌だと思ったことはありません。だから、父が障がい者でも悪いことばかりではないと思っています」。

逆境も成長の糧に

凛花子さんの強く優しい人格を作ったのは、母の教えが大きく影響している。印象的だったのは、「転んでも何かをつかんで立ち上がりなさい。小さくても何かをつかめば、それが今後助けてくれる」という言葉だ。この言葉に心を動かされた凛花子さんは、つらい経験も次に活かせるよう、悩みながらも一歩ずつ夢に向かって進んできた。

今まで出会った人たちが出会いを素敵なものにしてくれたと話す凛花子さんは、あしながさんとの出会いにも深く感謝をしている。

「見守ってくれているあしながさんを、もう一つの家族のように感じています。自分のことのように一喜一憂してくれる、素敵なあしながさんに支えてもらっていることを胸に、大学入試も頑張りたいです」

将来はあしながさんのような、顔を知られていなくても誰かのためになれるような大人になりたいという凛花子さん。

凛花子さんが来年の春、家族、恩師である医師、そしてもう一つの家族だと話すあしながさんに、笑顔でまた「ありがとう」と言えるよう心から願っている。

（瀬藤あおい記者）

なかま

声なき訴え　社会に届けたい

大学奨学生が高校奨学生の保護者にインタビュー

本会は今年10月下旬から11月中旬にかけて、全国の高校奨学生の保護者に対し、長引くコロナ禍の影響についてのアンケート調査および大学奨学生によるオンラインインタビューを実施しました。今回のプロジェクトに関わった学生たちの感想をお読みください。

インタビューは2021年度に採用された大学奨学生が中心となって行い、上級生が司会進行役をつとめた。インターネットで保護者と学生をつなぐという従来にない方法でも、学生は熱心に取り組んだ

見えづらくなった苦しさ

私は、高校奨学生の保護者の方へのアンケート調査に携わりました。アンケートの内容を考えるところから関わり、返ってきた回答を読み込みました。

保護者の方々の回答に目を通して、私たち「子ども」には見えていない苦悩がたくさんあることを痛感しました。それぞれ大変な状況で生活されているにもかかわらず、「頑張れないとは言えない」「頑張るしかない」という声が多く見られました。

弱音を吐くことすらできず、いつも気を張っておられるのかと思うと、胸が苦しくなります。また、「子どもがいるから頑張れる」という声もあり、アンケート調査を通じて、親の想いに触れることができたような気がします。

街頭から「あしながが学生募金」が消えて2年。たとえその存在が見えづらくなったとしても、ギリギリのところで踏ん張っている遺児家庭があるということを、改めて社会に訴えていきたいです。

コロナ禍では、「苦しい」と言うことすらはばかられるような雰囲気を感じます。みんなが苦しい、みんなが大変、それはまぎれもない事実だと思います。しかし、だからこそ弱い立場にある人や、声を上げる力を持たない人の存在は、より見えづらくなっている気がしてなりません。

アンケートの結果を見ていると、遺児家庭の抱える問題は複合的で、何か一つを解決すればうまくいく、というものではないことに気付きます。その現実に対しては、「どうすればいいの？」というのが率直な感情です。自分には誰も救えない、自分では何も変えられない、そんな無力感すら覚えます。

それでも当事者として、学生として、声を上げることをあきらめたくないと思っています。卒業も近く、できることとは少ないかもしれません。ただ私は自分だけではなく、私の大切な人にも絶対に幸せでいてほしいです。そしてそのためならいくらでも頑張ることができます。だから私は、今私にできることを精一杯頑張ります。

私たちは、奨学生もその家族も含めて「あしなが」を共通項につながることができた仲間です。直接出会うことはなくても、決してひとりではありません。

今回の調査を通じて、コロナ禍で聞こえづらくなっていた苦しい叫びだけでなく、前向きなパワーもいただきました。そういった声を、私たちはできる限り社会に届けていきたいと思っています。

（細井清花・大学4年）

これは私たちの使命です

私は大学1年生から「あしながが学生募金」に参加し、今年で4年目を迎えます。学生募金事務局では様々な役職を経験させていただき、常に最前線で活動してきました。

4年間活動を続けられた原動力。それは、「遺児や遺児家庭の声なき声」です。私自身も父を病気で亡くした遺児の一人ですが、遺児をとりまく困難は凄まじいものです。現状を変えるためには、誰かが勇気を振りしぼり、その声を世の中に伝えるしかありません。

学生は、とても弱い立場です。私だけの力で自分の家族や困っている遺児たちを救えるなら救いたいと思います。しかし、私にはまだそのような力はありません。だからこそ、「今、私にできること」を考え続けてきた4年間でした。

今回のオンラインインタビューのことを知り、「これが私の使命だ」と感じました。このインタビューを通して遺児家庭の現実をしっかりと受け止め、世の中に発信していきます。コロナの影響で満足に募金活動ができていませんが、絶対にあきらめません。この状況下でどうすれば社会に「遺児の声なき声」を届けられるのか、学生同士で話し合いを重ね、社会に大きなインパクトを残したいと思います。これからも「今、私にできること」を常に考え突き進んでいきます。

（岡本蓮・大学4年）

あしなが運動考える機会

今回の保護者インタビューには「小さな声を大きな社会に発信したい」という気持ちで参加しています。

今の遺児家庭が抱えているさまざまな問題は、コロナによる影響なのか。コロナ以前から続くものなのか。将来についてどんな不安をもち、今をどう生きているのか。

実際に進学をする子どもたちの「学びたい」声だけでなく、子どもたちの夢を「かなえたい」保護者の方の声を社会に訴えるのは、当事者である私たちだからできることだと思います。

2020年から3度の街頭募金の中止を経て、私たち自身が「あしなが運動」について考える機会が増えました。

あしながさんや多くの方に支えられて継続してきた街頭募金ができなくなった中、これまでとは違ったやり方で遺児の現状を知ってもらう方法を模索したり、多くの遺児たちを支援する方法は募金だけなのか、などの課題について改めて考えてきました。

コロナ禍は、50年の歴史を振り返り、一度立ち止まることで見えてくる視点を得る機会となりました。

いつも私たち子どものために生活を切り盛りしてくださっている保護者の皆様。普段はなかなか口にできないけれど、感謝の気持ちであふれています。今まで積み重ねてきたたくさんのご苦労や助けを必要とする声を、私たちが社会に訴え、支えていけるよう運動を続けていきます。

（市川朋佳・大学4年）

共生

副田調査なくして、あしなが運動なし

編集長　玉井　義臣

10月8日、わが生涯の盟友が、この世を旅立った。

日本を代表する社会学者のひとりでありながら、学者の枠を大きく超える破格の人だった。小説が芥川賞候補にまでなった作家志望時代があった。マンガを社会学の研究対象とし、マンガ評論の草分け的存在にもなった。福祉制度にも目を向け、福祉社会学会をつくり初代会長になった。組織をまとめる力も高く、筑波大学の副学長も務めた。

第12回後藤新平賞受賞を祝う会で、握手を交わす私と副田名誉顧問（2018・12・6、都内）

振り返ると、遺児を支える「あしなが運動」には、二つの推進力があった。ひとつは遺児の作文。もうひとつが調査だった。作文が「情」を伝え、調査は「理」を説いた。多くの人の心と頭に訴えるこの両輪があってこそ、遺児12万人の進学の夢をかなえることができた。

この半世紀にも及ぶ調査をけん引してくれたのが、わが盟友だった。日本社会の暗部を照らし出す手腕には、いつも感嘆した。書面でのアンケートや聞き取りだけでなく、保護者の家計簿も分析対象とした。交通遺児、災害遺児、病気遺児、震災遺児、自死遺児、アフリカの遺児……すべての調査・分析を引き受けてくれた。その結果、それぞれの遺児に、それぞれの悲しみがあることを浮き彫りにしてくれた。マスメディアに発表する際は、的確なキャッチフレーズもつけてくれた。調査の後は、私や職員と時にお酒も交わしながら、社会問題などについて、熱く語り合った。

盟友の調査の魂は、あしなが育英会の若い職員や大学奨学生に受け継がれた。「コロナ禍を必死に耐えている保護者の心の声を聞きたい」。彼らはアンケートとオンラインによるインタビューで懸命に探っている。近々、発表の予定だ。

「あしなが運動」の歴史に、副田義也（そえだ・よしや）の名と、この言葉をしっかりと刻みつけておきたい。

副田調査なくして、あしなが運動なし。

（2021.11.18 記）

あしなが運動の灯を消さぬために

佐藤弘康・リーダー育成課長

新型コロナ第5波が日本を襲う中、「あしなが学生募金」のリーダーたちの間では1日1日と危機感が高まっていた。「このままではあしなが運動の灯が消えてしまうのでは」。4度目となる街頭募金の中止が濃厚になったことで後輩遺児のために行動する機会が再び失われた。実践活動の場が無くなり、次世代のあしなが運動の担い手となる仲間が増えず無力感が大きくなる一方、それでも学生たちは「今、自分たちにできること」を模索し続けてきた。

社会全体が傷む中、コロナ禍以前から苦境にあった遺児家庭や障がい者家庭の「声」が聞こえにくくなっている。「今こそ保護者の生の声や胸の内を私たちに聞かせてほしい」という学生らの強い思いが、大規模な調査プロジェクトにつながった。

今回の調査では、あしなが高校奨学生の保護者約4000人を対象とした。遺児家庭や障がい者家庭の現状やコロナ禍前からの変化を把握するために、2018年に使用した調査票をもとに、学生と職員が議論を重ね、25の質問に集約させた。インターネットでの回答と調査用紙での回答を合わせ2621件が集まり、回答率は65％となった。

「長男が大学をやめ、次男は専門学校に行くのを諦めて就職します。親としてなにもできず息子たちが不憫で申し訳ない」といった保護者の苦悩が数多く寄せられている。

アンケート調査に加えて、保護者から直接生の声を聞かせてもらうため、オンラインを利用した大規模なインタビュー調査をあしなが育英会として初めて実施。11月初旬、2週間にわたり約130人の保護者に対して、大学奨学生1000人がグループに分かれて聞き取りを行った。

インタビューの進行役は、あしなが学生募金事務局の有志が務めた。事前準備として遺児の心のケアを通して培った経験をもとに、「関わり方」について学び「聞く力」を高める研修会を開催。職員が講師となり、聞き取りを行う学生全員が受講した上で本番に臨んだ。

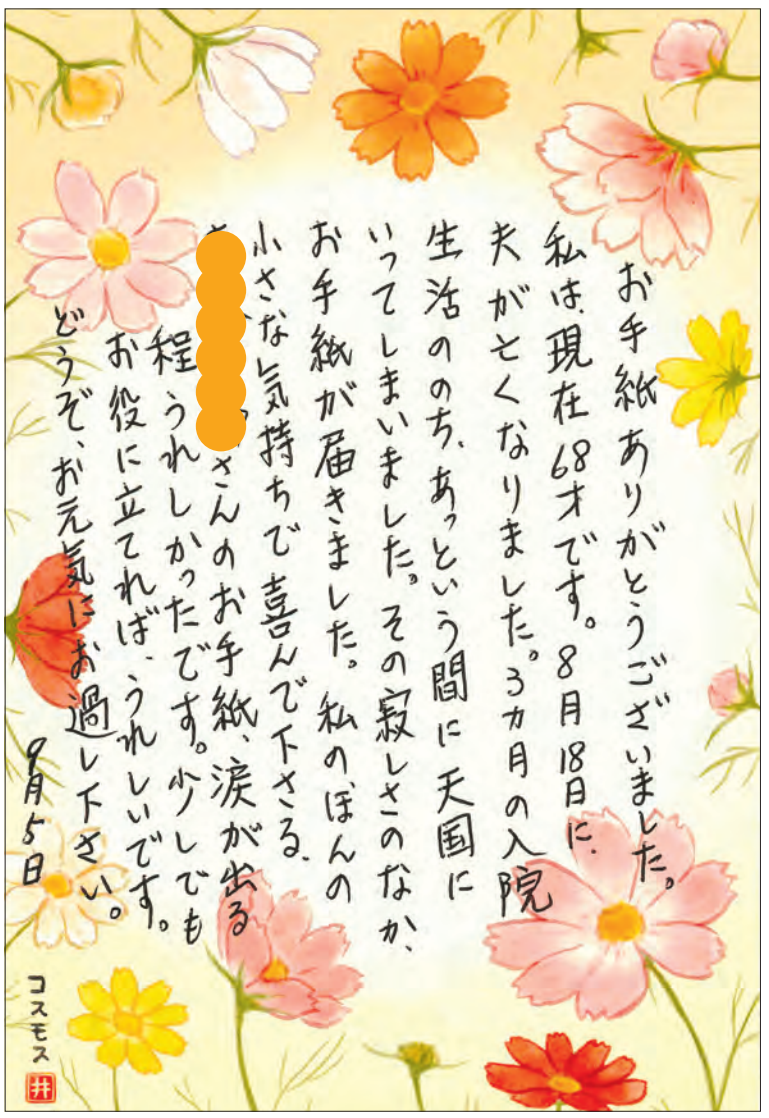
インタビューでは大学奨学生が「実は自分も父親を亡くしていて…」「私の親も障がいをもっていて…」と自身の体験をもとに質問する場面が多くみられた。当事者同士の共感が生まれることで、緊張していた保護者の眼差しが変わり、お子さんの将来についての不安など、本音を率直に語ってくれることにつながった。その言葉一つひとつから見えてきた現状や、学生自身の意見も含め、今後詳しく調査レポートにまとめ発表する。

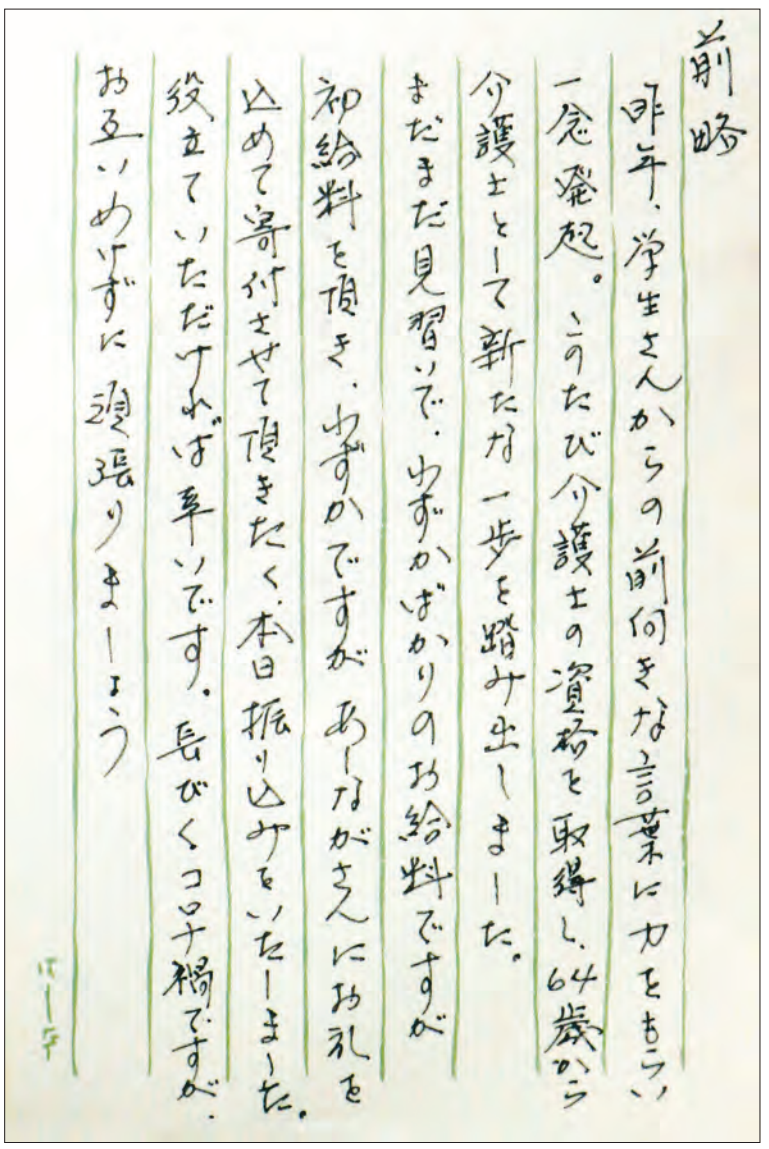
奨学生のみなさん　残暑見舞い ありがとう

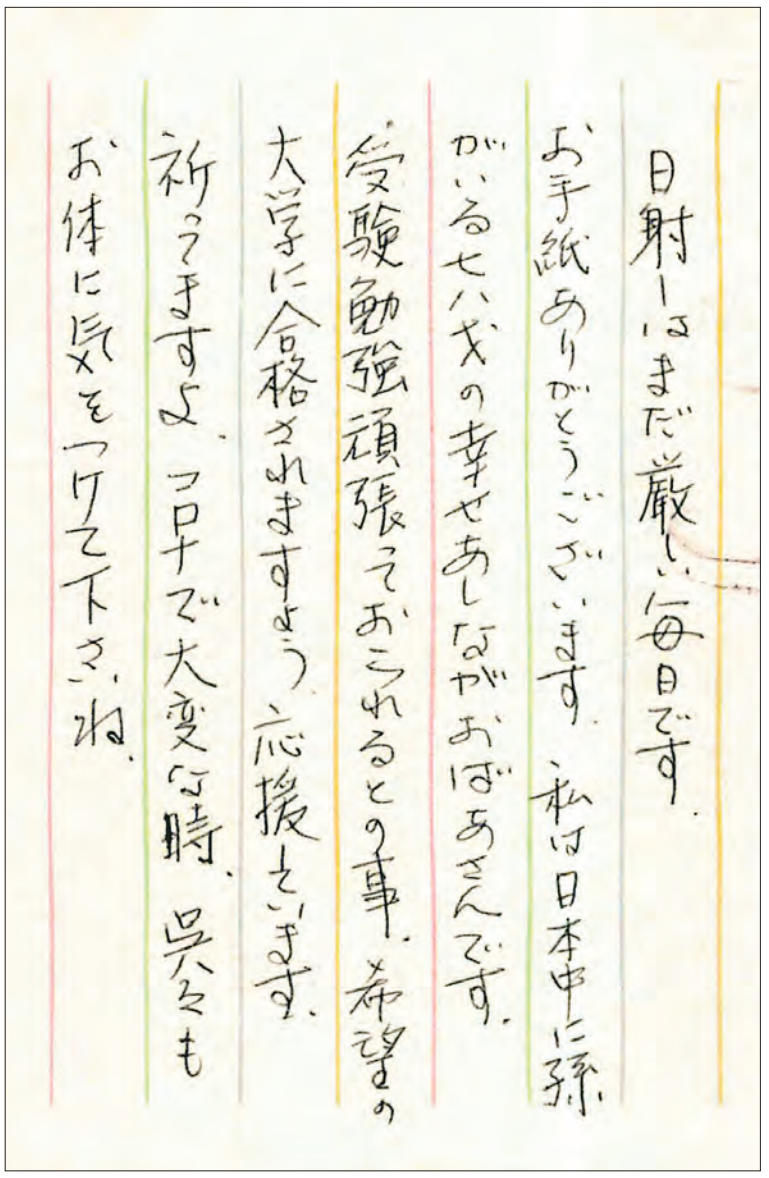
特集 あしながさんからのお手紙

学生さんの言葉から喜びと力をもらいました

奨学生からあしながさんにお送りした「残暑見舞いハガキ」へのお返事が今年も届きました。例年以上にたくさんのお手紙をいただき、特に「学生さんのハガキを読んで、自分も元気をもらった」という声が多数ありました。コロナ禍で孤立する人が増える中、奨学生とあしながさんの絆をあらためて感じます。心のこもったメッセージをぜひお読みください。







亡くなった妻からのメッセージは、「私は太陽であり風であり花になったよ。だから寂しくなったら外に出て風に当たってね。自然を美しいと思う気持ちを大切にしてね。」

この言葉を我が子に伝えました。そしてこの言葉を皆さんへの応援メッセージにかえさせて頂きます。

特集　あしながさんからのお手紙

体調を崩した私への特効薬となりました

お便りにうれしい驚き

おハガキありがとうございます。僕は52歳の公務員、学生さんから見れば文字通りおっさんです。

育英会さんへ寄付をすればこんなお便りがいただけるのかと驚きましたし、うれしく思いました。いろんなことにがんばっておられ、すばらしいと思います。若くても無理は禁物、お体を大切に過ごしてください。

僕は20代後半からボランティアに関心を持ち、仕事の合間をぬって献血や災害ボランティア、少額の募金などをやってきました。

でもこれまでを振り返って、国内の若い人への支援が足りなかったと思い、今回寄付しました。これからも続けていきます。

仕事では頭、人には心

お便りありがとうございました。先ずは就職内定おめでとうございます。

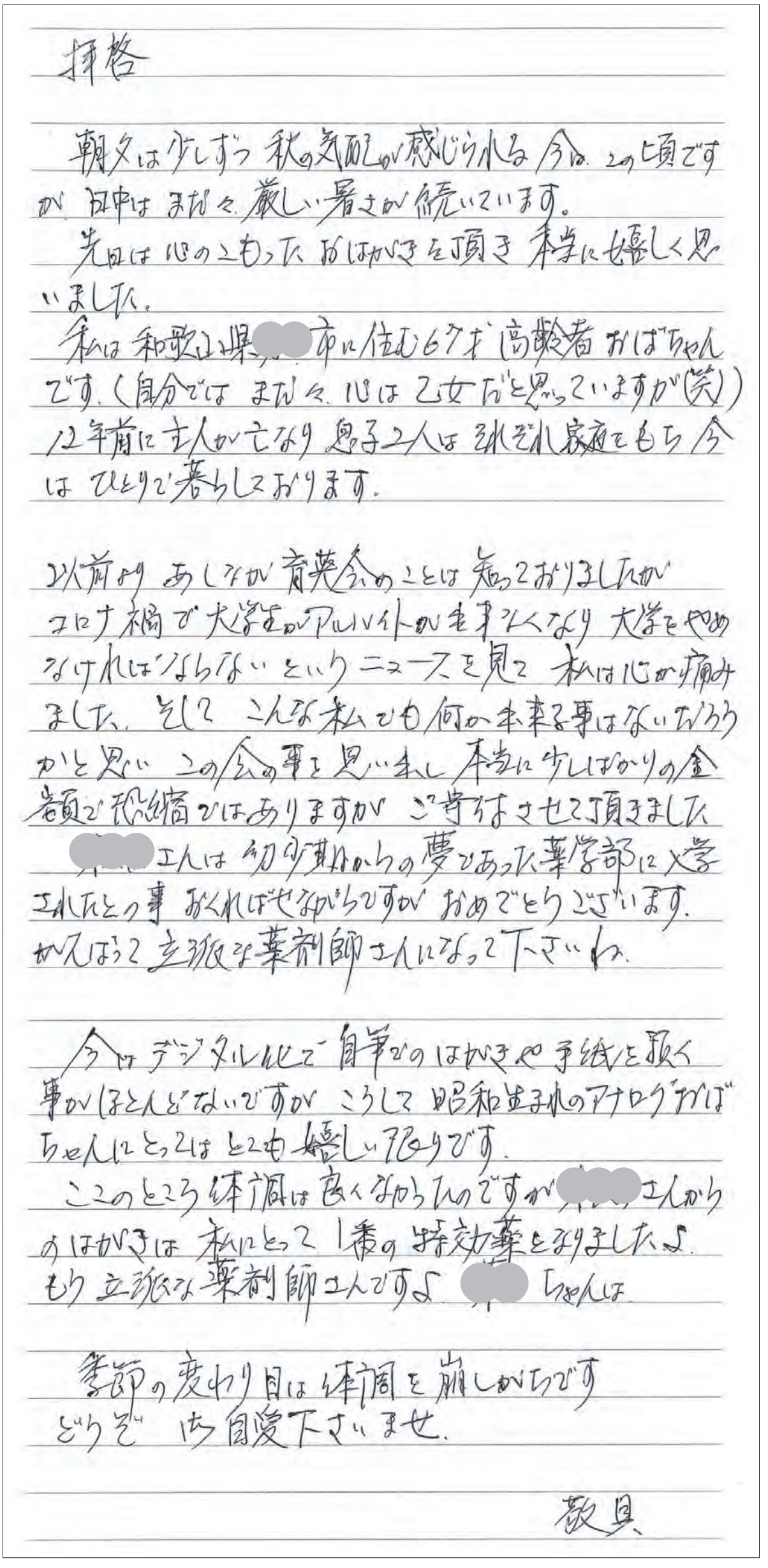
学生生活の大事な時間もまならず、コロナ禍での就活は大変だったと思います。でも今を乗り越える力は将来きっと役に立つはずです。

私は昔、社会人になりたての頃、仕事では頭を使い、人間関係では心を使うことを教わりました。

この未曽有の事態が収束し、あなたの卒業式と社会人のスタートラインが暗雲の去った青空の下にあることを、心より祈っております。お元気で。

あなたが未来を作る

未来がどうなるか誰にもわかりませんが、誰が未来を創っていくのかはわかります。それは「みなさん」です。



拝啓

朝夕は少しずつ秋の気配が感じられる今日この頃ですが日中はまだまだ厳しい暑さが続いています。

先日は心のこもったおはがきを頂き本当に嬉しく思いました。

私は和歌山県[　]市に住む67才高齢者おばちゃんです。(自分ではまだまだ心は乙女だと思っていますが(笑))

12年前に主人が亡なり息子2人はそれぞれ家庭をもち今はひとりで暮らしております。

以前よりあしなが育英会のことは知っておりましたがコロナ禍で大学生がアルバイトも出来なくなり大学をやめなければならないというニュースを見て私は心が痛みました。そしてこんな私でも何か出来る事はないだろうかと思い この会の事を思い出し本当に少しばかりの金額で恐縮ではありますがご寄付させて頂きました

[　]さんは幼少期からの夢であった薬学部に入学されたとの事おくればせながらですがおめでとうございます。かんばって立派な薬剤師さんになって下さいね。

今はデジタル化で自筆のはがきや手紙を頂く事がほとんどないですがこうして昭和生まれのアナログおばちゃんにとってはとても嬉しい限りです。

ここのところ体調は良くなかったのですが[　]さんからのはがきは私にとって1番の特効薬となりました。よもや立派な薬剤師さんですよ[　]ちゃんは

季節の変わり目は体調を崩しがちです
どうぞ御自愛下さいませ。

敬具

特集　あしながさんからのお手紙

私も若い頃、働きながら苦学した

心のこもったお葉書を頂戴し、ありがとうございました。

私は4人の息子を持つ48才の父親です。三男が今ちょうど、○○さんと同じ高一です。長男は今、大学二年で建築を学んでいます。

私の父母は、一生懸命働いて家族を養ってくれましたが、経済的にはなかなか恵まれず、慎ましく暮らしておりました。親類の事業失敗による借金の肩代わり、交通事故による透析治療となった身内もおり、不運が重なっていました。

私はたまたま家族の中で少しだけ学校の勉強ができ、両親がギリギリのところで学資ローンを組んで、私を大学まで行かせてくれました。大学時代に会計士の資格を目指し、働きながら苦学した結果、25才の時に合格、以後も周りの方に支えて頂きながら、やってこれました。

頑張っていても、結果がでるまでは不安でいっぱいで、わざわざお金をかけて自分が進んでいる道が正しいのか、迷うことがたくさんあります。でも、目標を持って明るい未来を信じ、前向きに常に努力を続けていけば、必ず成果になって現れます。

私は若い頃に少しお金で苦労した経験から、今の若い世代の力に少しでもなれればと、今年から育英会に参加をはじめました。

20代の前半は、将来が全く見えない中で暗闇の中を歩いている感覚でしたが、一歩ずつ進み、周囲の支えで、おかげ様で素晴しい家族と仕事に恵まれました。

○○さんも愚息と同じ年代の未来ある若者です。素敵な未来が待っていると思います。応援していますので頑張って下さい。

残暑お見舞いありがとうございます。

社会人デビューを機に初めて寄付したのですが、このように丁寧なお見舞いを頂き、びっくりしています。教育福祉を学ばれているとのことで、若い時分からしっかりと将来を見据えていらっしゃり、感服しました。これから様々な人と関わられると思いますが、そのために今のうちに「学び」だけでなく、「遊び」も目一杯楽しんでください。

お身体に気をつけてお過ごしください。

特集　あしながさんからのお手紙

つながる空の下でいつも見守っています

先日はお便りありがとうございました。うれしく拝見させていただきました。
幼くしてお父さまを亡くされ、今は医学部に向け勉学に励んでおられるとのことですね。私は、38年看護師として病院に勤めておりましたが昨年春に退職し、実家の両親の介護の手伝いをしつつコロナワクチンの集団接種のお手伝いをさせていただいております。
医療の現場はなかなかきびしく、今はコロナでさらに大変な状況になっていますね。しかし、私が勤めさせてもらった38年の内には患者さんやその御家族とのふれあいの中でたくさんの元気や勇気をもらいました。
○○さんもきっとたくさんの患者さんやその家族の方々に夢や希望を与えながら○○さん自身も元気や勇気をもらい、立派な医師になられることと思います。
また気が向いた時に近況等知らせていただけるとうれしいです。

勉強したことはなくならない

お便りありがとうございました。コロナ禍の中、看護の実習など何かと大変でしょうね。私も奨学金（日本育英会）で大学を卒業しました。子どもの時から母に言われ続けたのは「勉強したことはお金のようになくなったりしない」ということです。80歳近くになり、この言葉が真実であったと思うこの頃です。
どうか健康に留意なさって国家試験を突破されますように。

おハガキ、巡って私の手元に届きました。
いま、高3の夏をむかえられ、これまでたくさんの努力、人生経験を重ねてこられたご様子を行間から感じました。
本当にこれまでよくがんばってこられましたね。
物理・科学への道を目指されるとのこと、それをひとつの扉にして○○さんの人生がひらいて、ひらいて、ひらいていくことをお祈りしています。
自由に、思うままに人生を楽しんでください！

あしながさんのひとり、より

素敵な絵ハガキありがとう

お便りありがとう！　とてもうれしいです。ここは札幌といっても外れに近いので山に囲まれてて、リスやキツネによく逢います。数年前にはキツネが家の前、私のすぐ近くでお腹を見せつろいでいました。日中は気温が24～25度になりますが、夜には10度前後下り、虫が鳴いています。お体に気をつけて励んでくださいね。
イラストと詩も素敵ね。

特集　あしながさんからのお手紙

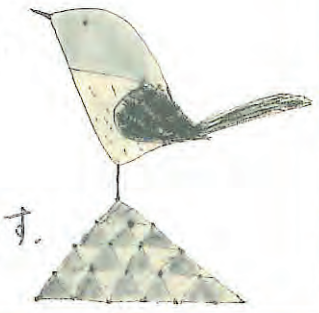
小5で父を亡くした日々を思い

ステキなお葉書、ありがとうございました。
思いがけず頂いた葉書から、[redacted]さんの将来に向かって頑張られている姿が目に浮かび、大変嬉しく思いました。
私自身、小学5年生の時に父を病いで亡くしました。兄2人との3人を母が育ててくれました。

私は、「あしなが基金」のお世話になりませんでしたが、幸運にも大学進学を叶える事が出来、教職に就く事も出来ました。数年前に退職致しましたが、時々大変だった頃の事を思い出します。
以前は、街頭での募金をさせて頂く機会もありましたが、コロナ禍の中で、苦労なさっている方も多くいらっしゃると思います。

どんな境遇でも、夢を諦めることの無い世の中になって欲しいものです。
どうぞ、これからいろいろな事があるかと思いますが、自分を信じて前進して下さい。
応援しています！

最後に…、私の娘二人も、現在、看護士をしています。
一人は訪問看護士、もう一人は病院勤務を毎日頑張っています。
大変そうですが、やり甲斐のある仕事ですよね。
娘達も、[redacted]さんを応援してる！と言ってます。
健康に気を付けて、日々楽しく充実して過されますよう、願っています。
お元気で！



21.9.6

この度はおハガキ、有難うございました。
とても嬉しかったです。10年以上もバスケットボールを続けていたんですね。辛いこともあったかと思いますが継続した努力とチームワークは社会に出てから必ず役に立ちます。私も中・高と運動部でしたが、やはり先輩・後輩関係は社会に出てから役に立ちました。
勉強も頑張って下さいね。志望校に合格できるといいですね。今はこんな大変なコロナ禍でできることが限られてしまっています。でも、その中でもできる限りのBESTを尽くして下さい。

その為にも私達がいます。
ニュースを見ていると、ひどい事件が報道されていることも多々ありますが、悪い人達が多いわけではありません。人はお互いに助け助けられ生きていけるものだと思っているので、私も可能な限り支援し続けていきます。
[redacted]さんも大人になって色々経験していかれると思いますが、協力し合うという精神を育ててもらえたら良いなと思います。
これからも協力するので、自分を大切に頑張って下さい。

笑顔で毎日を過ごして

いつもがんばってますね！
苦しい時があっても、希望を持って、できれば笑顔で毎日を過ごしてください。「笑う門には福来る」だと思っています。困った時は人に頼って大丈夫。きっとあなたも誰かを助けているはずです。

振り返れば人生は楽しい

お葉書ありがとう。がんばってますね。私は1931（昭和6）年生まれの90歳です。太平洋戦争の終わった年、1945（昭和20）年は、私が旧制中学2年の夏で、それからいろいろ苦しいこともありましたが、結婚し子どもにも恵まれ、長（なが）の人生をたどりました。途中己の才能の乏しさに気づき、職場を変わったこともありましたが、今では周りから助けられて、感謝の日々を送っております。
大学では日本育英会の奨学金を受けて、幸いにも卒業後すぐに公職に就き、奨学金の大部分を返還免除の恩恵に預かりました。有り難いことです。振り返ってみると、人生は楽しいことばかりでした。あなたにも未来は開かれています。よき人生を送ってください。

特集　あしながさんからのお手紙

夢への努力、それが今後の君を支える

前略、暑中見舞ありがとうございます。お互い暑い中、そして新型コロナウイルスが猛威を振るう中、大変な夏を過ごすことになってしまいました。そんな状況でも君が頑張っている様子をうれしく思います。

私はもう退職した年齢ですが、大学を夜間部に通いました。昼間町工場で仕事をし、早めにあがらせてもらって、夕方から夜九時、十時頃まで学校に行くという生活です。自分の学びたいものだけを学んでいましたので苦労はなく、のんびりしたものでしたので、今の君とは比較できませんが、将来への不安や悩みはあっても充実した日々でした。

自分の夢を実現するのは、努力だけではどうにもならないものがあります。しかし、夢に向かって進むことで得られるものがたくさんあります。それが今後の君を支えます。これからも毎日を大切に過ごしてください。

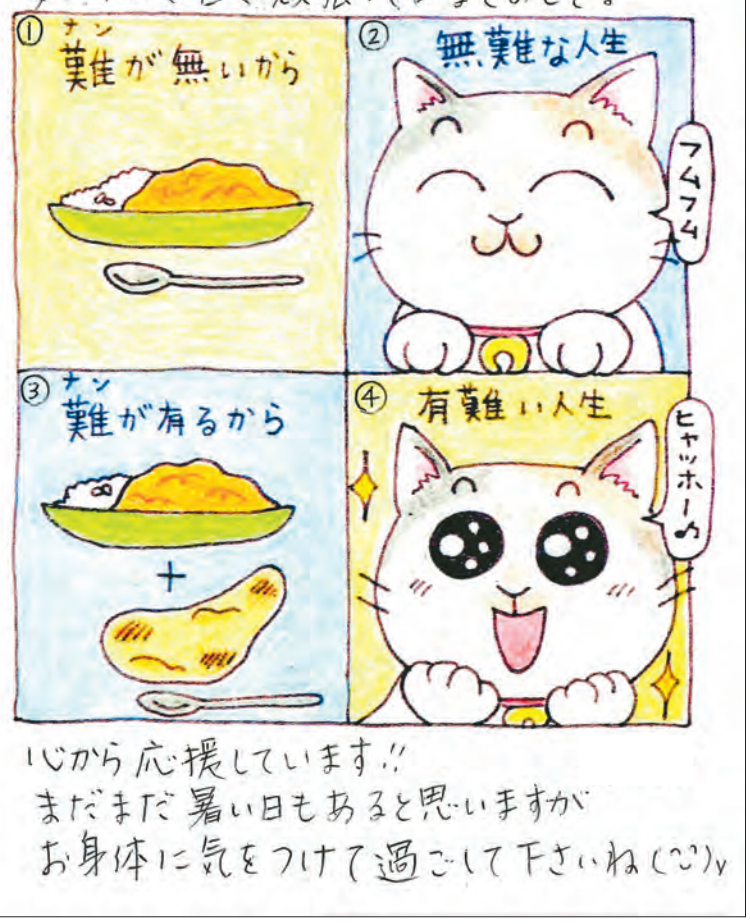
草々

お便りありがとうございました。

私は30年前、来国で脊髄を損傷し、NJ州のリハビリ専門病院に3ヶ月入院した経験があります。その後社会復帰し、帰国後も何とか定年まで勤め上げることができましたが、これも全て当時の理学療法士の方々の献身的努力のお陰と感謝しています。

厳しい現実もあるでしょうが、プロの理学療法士を目指して頑張ってください。大変やり甲斐のある仕事です。私も「あしながおじさん」として応援していきます。

はじめまして！お手紙ありがとうございました。うれしかったのでお返事を書きました。(宛名の漢字(お名前)が間違っていたらゴメンネ)
夢に向って日々頑張っているとのこと。



心から応援しています!!
まだまだ暑い日もあると思いますが
お身体に気をつけて過ごして下さいね(^^)v

感想を募集しています

今回の4～9面で紹介した「あしながさんからのお手紙」を読んで、みなさんはどんなことを感じたでしょうか。手紙またはメールで感想をお寄せください。保護者の方も大歓迎です。

あしなが育英会　広報部
〒102-8639　千代田区平河町2-7-5 砂防会館本館4階
pr@ashinaga.org

※お寄せいただいた文章は、お名前は出さずにあしなが育英会の広報活動に使用させていただく可能性があります。

のあしながさん」

誕生40周年記念企画

花・神奈川県・高2

少羅・兵庫県・高3

0）ブルンジ出身

ラストが届きました～

注ぎ、「愛を分けてくれてありがとう」
ッセージが添えられています。「ありが
セネガル、コンゴ、モーリタニアなど

カ遺児高等教育支援100年構想候補
学ぶことを目標に猛勉強しています。
の利用を広めることだそうです。

者の方からもお待ちしています！
aga.org
記入ください。

あしながさんを描いて40年　画家・天野聡美さん（奨学生OG）

「季節やテーマに合わせて、いっしょに描く花や動物、子どもたちの服装などにも工夫を凝らしています」

シルクハットの紳士の後ろ姿と、足下で遊ぶ子どもたち。小説『あしながおじさん』に着想を得たこの絵は、40年前、当時美大生だった天野聡美さん（現・本会副会長）が描いて以来、遺児支援のシンボルとして愛されてきました。あしながさんイラスト誕生40周年を記念し、全国の奨学生から届いた作品をご紹介します。

自然の中で育んだ感性

天野聡美さん（61）は4歳のとき交通事故で父を亡くした。父のことはまったく覚えていない。お葬式の写真には、晴れ着姿でポーズをとる幼い聡美さんが写っている。

「最後だから『お父さんにきれいな恰好を見せてあげなさい』って、ご近所の人に着せてもらったのね。でも私は父が亡くなったということもわからなくて、ただはしゃいでいたみたい」

父の死後は母と姉とともに、都内から埼玉県越生町へ移り住んだ。三方が山に囲まれた自然豊かな町。内気でおとなしい性格だった聡美さんは、いつしかノートや画用紙に風景の絵を描くようになった。空に浮かぶ雲、山の稜線、季節の草花。小学5年生のとき、図工の自由課題で描いた神社の絵が絵画展で入賞した。いじめられることの多かった日々で、初めて認められるうれしさを知った。

「絵が私の居場所なんだ！」

美大に進学し、心塾生に

中学に上がってしばらくした頃、テレビで日本画家・東山魁夷の特集を観て、作品の美しさに衝撃を受けた。高校生になり、「一生飽きないで続けられるものは何だろう」と自問したとき、制作に向き合う魁夷の姿がよみがえった。

「大学で日本画を学びたい」。聡美さんの願いを、母は全力で支えた。昔から家計に余裕はなかった。下着や靴下の入った段ボール箱を役所から支給してもらっていた時期すらある。そんな中でも母は少ない給料と内職をなんとかやりくりし、2人の娘の学費を捻出してくれた。

「親戚からは大反対されたそうだけど、母は子どもの可能性をつぶすようなことは決して言わなかった。だから私も母のくれたチャンスを無駄にしないよう、勉強や作品制作に精一杯取り組みました」

進学した女子美術大学へは、遺児学生寮・心塾から通った。〈あしながさんイラスト〉を描き始めたのは、入学して3年目のことだ。

子どもの姿が「恩返し」

「街頭募金で配るポストカードに、あしながさんを描いてくれないか？」

心塾の廊下で突然、玉井塾長（現・本会会長）に声をかけられた。面食らったが、自分の特技を遺児の仲間のために活かせるなら、と快諾。高校奨学生から寄せられた詩に、足の長い男性の後ろ姿のイラストを添えたポストカードは、道行く人々に喜ばれた。

「チラシだと受け取ってもすぐ捨てられちゃうけど、イラスト入りのポストカードなら家に持ち帰ってもらえるでしょ。それから残暑見舞い、年賀状、卒業礼状のハガキや機関紙にもあしながさんを描くようになって。1枚きりのつもりでOKしたら、気づいたら400枚（笑）」

初めてあしながさんを描いた年から、今年で40年。就職・結婚・出産を経ても途切れることなく描き続けたこのイラストは、もはや聡美さんのライフワークだ。

「イラストを通して伝えたいのは『あしながさんへの感謝』。だから、あしながさんと一緒にいる子どもたちを生き生きと描くようにしています。子どもたちが楽しく、幸せに、元気に生きている姿を見せることが、いちばんの恩返しだから」（新元愛美記者）

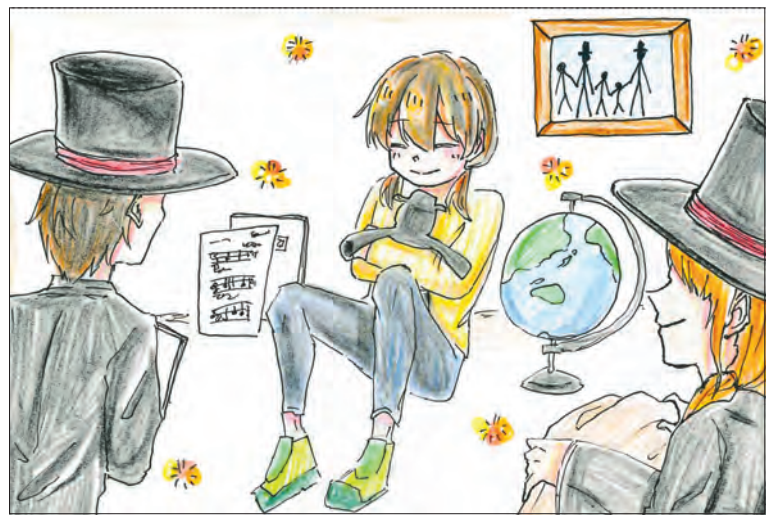
絵筆に込めた「ありがとう」

聡美さんによる最初のあしながさんイラスト（1981年制作）

奨学生が描いた「私

遺児支援運動のシンボル 記

川田茉侑・埼玉県・高１



西村奈乃佳・岡山県・高２

田中彩

小林愛美・茨城県・大２

八木沢美月・茨城県・高２

山城汐

辻野百美・兵庫県・高２

大原晃穂・奈良県・高２

廣瀬朱音・京都府・大１

ジョディ・ンガビレ（20

～アフリカの学生からもイラ

輝く太陽からあしながさんの大きな愛が降り
「あなたのおかげで夢がかないます」というメッ
とう」と伝える学生の体に書かれているのは、
のアフリカの国々の名前です。

イラストを描いたのは、本会が進めるアフリ
生のジョディさん。フランスの大学で生物学を
将来の夢は母国の医療整備と、医用生体工学の

「私のあしながさん」イラスト募集中！

あなたの思い描く〝あしながさん〟のイラストをお送りください。現役奨学生はもちろん、卒業生や保護

あしなが育英会 広報部

▶〒102-8639　千代田区平河町 2-7-5 砂防会館本館４階　▶ pr@ashin

▶お手紙またはメールにお名前と住んでいる都道府県、学生の方は学年をご

「あしながさん」誕生　無償の愛の物語

玉井 義臣

遺児を支える「あしなが運動」の土台となった寄付制度「あしながさん」。その誕生は遺児を想う人々の無償の愛の物語だった。当時の私（玉井）の文章から経緯をご紹介したい（『あしながおじさんへの手紙』サイマル出版会）。

◇

遺児への定期便

この何年間か、毎月一度定期便のように届く現金書留を心ひそかに待つ自分に気づく。

「菜種梅雨もやっとあがり六日ぶりに青空がみられました。扨（さて）五千円同封しました。物価高の折増額したいと思ひ乍（なが）らも出来ず僅少で何のお役にも立ちませんでせうが、よろしくお願ひいたします」

和紙の便箋一枚に、水茎の跡も鮮やかに書かれ、文型は十年寸分も違わぬが、馬車馬の私に日本の雪月花を想い起こさせてくださる風物詩である。遺児たちへの淡々たる愛情がうれしい。

送り主はわからない。ただ東京本所局の消印があるだけ。文章にみられる漢字、仮名づかい、表現の繊細さからして、かなり老齢の教養豊かな女性であろうか。

ある日、一本の電話を偶然私がとった。本所局消印のご婦人からだった。簡単な問い合わせだった。私は何度もお礼を述べ、せめて子どもらの作文集でも送らせてほしいとお名前をたずねたが、笑って答えられなかった。想っていたとおり、品のいい、教養のあふれる、優しいオバアチャマだった。老婦人は一言、「毎月、身内の墓参りに行き、近くの郵便局から送るんですよ」とさりげなかった。「陰徳」という言葉が私の心に浮かんだ。私は感動し、それ以上きくことができなかった。

ありがたいことに、私には〝応援団〟が多く、いろんなアイディアを授けてくださる。

〝応援団〟の一言

ある日、評論家の樋口恵子さんが、「玉井さん、何も応援できませんが、いまの私にできるのは、子どもに何の義務も負担も感じさせずに、毎月奨学金を出すぐらいのことです。それを制度に考えてみられては……」といってくださった。

どうすれば支援者の心が素直に通じ、受ける方でも心から感謝するものになるか、これは以前から私のテーマでもあった。

三年前の昭和54年の春、交通遺児育英会は創立十年目に当たり、インフレと不況のあおりで資金は底をつき、奨学金は向こう半年分しかない状態で、局面の打開をはかるアイディアが必要だった。

私はふと、本所のオバアチャマの陰徳と樋口さんのアドバイスを合わせて、夢のある〝奨学金制度〟ができないものか、と思った。

世の中には、子どもがほしくてももてない人がいる。養子を迎えるには壁も多い。でも、もちたい。またご自分の子の養育のほかに余裕があるので他人の子も育てたい、というキリスト者も知人にいた。

一方、交通遺児には母親がいるが、貧しくて高校へやるのも大変だ。奨学金でせめて高校へ進学させるのは母親の願望だけでなく、国の責任であり、社会の願いでもある。

この両者の願いを結びつけることはできないか。一方に子どもがほしい人びとがおり、他方に教育費に困る遺児がいる。〝教育養子〟〝教育里親〟というのはどうだ。一方には母親がいるから、お互い名乗りあうと人間関係が複雑になる。

亡き姉の愛読書

このとき私の頭をよぎったのは、貧困と過労でカリエスを患い、若くして逝った読書好きの姉の愛読書、ウェブスターの『あしながおじさん』だった。少年の私は字は読まなかったが、孤児のジルーシャ・アボットが奨学金を贈ってくれるあしながおじさんに書き綴る手紙のなかで描くイラストの断片が、妙に頭にこびりついていたのだろうか。

ポッとそれが飛び出してきたのだった。そうだ！〝あしながおじさん〟だ！

どこかの誰かが遺児の誰かに奨学金を、その子が高校を卒業するまでの三年間そっと贈りつづけ、お互いに名乗りあわない。〝あしながおじさん〟（現在は「あしながさん」という）の奨学金制度は54年4月19日の朝刊各紙で発表するや、ものすごい反響をまきおこした。育英会の電話は鳴りっぱなしだった。

女優の森光子さんも自ら電話で申し込んでこられ、名前を聞く段階で「あの森さんですか」とたずねるまで名前は出したくなかったご様子だった。また読売新聞の「編集手帳」で紹介されるや、その日のうちに全国から百人以上の電話での申し込みがあった。

主人に内緒なので領収書は送らないで、という奥さんもおられた。貧乏で高校へ行けなかったから、せめて見知らぬ交通遺児の君が……とか、母子家庭なので奨学金で夜間高校を出たその恩返しに……とか、聞いていて胸がつまった。お金持ちというより、ごくふつうの〝庶民〟が圧倒的だった。

こうして一か月で一五〇〇人もの篤志家が申し出てくださった。電話を受け、申込書を読みながら、私たちは感動の涙にむせんだ。

定期便の筆者で「元祖・あしながさん」ともいえる上田都美さんは、2010年7月9日に亡くなられた。享年88。歯科医を続けられ、遺産はすべてあしなが育英会に遺贈された

森光子さんは「あしながさん」になるだけでなく、街頭募金にも参加。街頭で遺児支援を訴えてくださるなど、あしなが運動の大恩人だった。写真は1991年、東山紀之さん（左端）とともに募金に立つ森さん（右から2番目）

「永遠のあしながさん」になっていただけませんか

遺贈相談室を開設しました

☎ 0120-971-546

（平日9～17時・年末年始を除く）

不動産などのご寄付もうけたまわっております。
お気軽にお問い合わせください。

✉ legacy@ashinaga.org

ホームページもご覧ください

あしながさん大調査　回答5546人

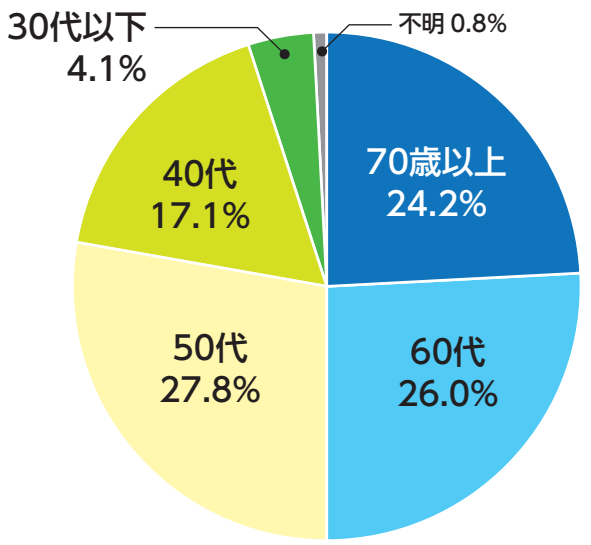
副田義也・筑波大名誉教授グループ共同プロジェクト

あしなが育英会の遺児支援活動を支えていただいている「あしながさん」は、どんな動機で寄付を始めてくださったのか。寄付を続けることで、どんなお気持ちになっていらっしゃるのか。本会は社会学者の副田義也名誉顧問（筑波大学名誉教授）の研究グループと共同で、昨年初めに「あしながさんの経験と意識にかんする調査」を実施。アンケート用紙を約1万人にお送りし、5546人から回答をいただいた。

寄付を始めたきっかけは、「遺児と保護者を支えたい」が76％でトップ。約5割が寄付を継続する中で「社会の助け合いが大事」「人に知られず誰かの役に立てることがうれしい」と感じていらっしゃった。また、多くの方がご自身も「奨学金の支援を受けた」「家族と死別した」「母子、父子家庭で育った」といった経験をお持ちだった。

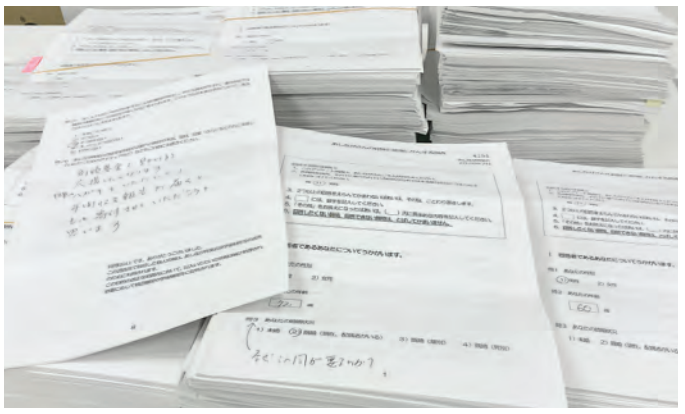
調査にご協力いただいたあしながさんに心より御礼申し上げます。10月8日に亡くなられた副田名誉顧問への感謝も込めて、調査結果の要点をご報告します。

● 年齢（年代別）



● 性別（男女比）

不明 0.4%



多くのあしながさんが手書きでご意見を寄せてくださった

■あしながさんの経験と意識にかんする調査
対象：継続的に複数回ご寄付いただた方　1万50人
回答数：5,546件（回答率55.2%）
調査時期：2020年1月、2月
調査方法：
アンケート用紙を郵送し同封の返信封筒にて回収
調査実施者：
副田義也・筑波大学名誉教授、株本千鶴・椙山女学園大学教授、時岡新・金城学院大学教授、加藤朋江・福岡女子短期大学准教授、遠藤恵子・城西国際大学准教授、富井久義・社会情報大学院大学准教授

学生さんは皆、私の子どもと思っています
生きている限り「あしながさん」でいたい

あしながさんの声

私は進学断念 皆は学んで

私は14歳で父を亡くし母の手でなんとか高校までは出ました。しかし強く望んだ大学進学は出来なかったのです。その経験から、学びたい学生を支えたいとの思いが、今まで「あしながさん」を続けられた理由です。

ささやかな私の助けで、子どもの進学の一助になることは私の喜びです。私は「あしながさん」で支えられている子ども達、学生達は皆、私の子どもと思っています。今私は高齢、84歳の年金暮らしですが、これからも死ぬまで「あしなが」の学生を支えるつもりです。

〝ガンバレ〟「あしなが」の皆さん、学生さん!!

（84歳・男性・北海道）

支援することが癒やし

昔父を亡くした際、中学2年生でした。生活費の不安、進学など将来の不安は大きく、「大丈夫心配しなくて良い、人生をあきらめなくて良い」と、この国の中で励まし、手を差し伸べてくれる大人はいるのだろうか。そうあってほしいと痛烈に感じたことは忘れません。遺児を支援することが、当時の自分の大きな悲しみを癒やし続け、自分を救っている部分があります。

（40歳・女性・愛知）

夫を亡くし親子2人で

若くして結婚、すぐ子どもに恵まれましたが、主人が病死して親子2人で実家に居候させてもらい息子を大学まで行かせることができました。

その間主人の実家からは援助は一切ありませんでした。子どもが小学生になったときから私も働きに出ましたが、実家の両親のおかげで人並みに生活でき教育をうけさせることができました。この恩を我が家のような母子家庭で学校に行けない子どもたちの助けに少しでもなればと思い、あしながさんになったわけです。

今は両親も亡くなり、わずかな金額でも生きているかぎりはあしながさんでいさせてもらおうと思っています。

借りた奨学金は返さなきゃいけないと思いますが、働きながら四苦八苦し、20数年かけて完済した息子を見ていたら、いい職業につきながらわざと返金しない人もいると知り腹立だしく思っていました。

今回あしなが育英会が返さなくてもいい奨学金制度を導入したことはとてもいいことだと思います。これからも応援します。お互いに頑張っていきましょう。

（73歳・女性・長崎）

東北津波、泣くことしか

ごくごく普通の家庭に育ちました。贅沢はしていませんが、困らない程度に過ごすことができました。結婚し子どもにも恵まれ、普通の毎日がとても幸せだと強く感じたのは、東日本大震災での被害の状況を見てからでした。

当時、3人目を生んだばかりでした。テレビの前で泣くことしかできませんでした。親を亡くされた子、子どもさんを失った方、こんな私でも少しでも何かの役に立てることができればと思ったのが、あしなが育英会でした。

社会貢献しているという気持ちはありません。恥ずかしいくらいの少しの金額です。でも自分が無理せずに長く続けたいと思っています。そんな気持ちを持っている方に、広く知っていただければと思います。（46歳・女性・佐賀）

「あしながさん」大調査

「遺児や保護者を応援したい」76%

あしなが育英会を寄付先に選んだ理由

遺児やお母さん、お父さんなど応援できるから	75.5%
教育を支援する団体だから	63.5%
信頼のおける団体だから	47.4%
運営の仕方がわかりやすいから	10.8%
新聞やインターネットでよく見る団体だから	5.3%
何かしようと思ったとき、よびかけがあったから	4.4%

生きることに苦労している親子がいるなんて…

私のまわりにも「あしなが育英会」を知る人は少ないです。メディアを通じて活動を発信していけば良いのですが…。あしなが新聞を読んでいつも涙が出てしまいます。これほど生きることに苦労している親子がいるなんて。少しでも子どもたちの希望に添える手助けになれるならと思い続けております。その中立ちをして下さるあしなが育英会には感謝しております。　（60代・女性）

「あしながさん」になった動機

だれか他人のために役立ちたい	74.2%
いまの自分の幸福に感謝してその一部をわかちたい	42.8%
社会のために役立ちたい	33.8%
かつて受けた恩返しをしたい	13.6%
身内に不幸があったので供養・追善をしたい	4.0%

未来をになう子どもたちのため

少額ですが毎月させていただいています。私自身、体調不良で仕事を退職し今無職ですが、未来をになう子どもたちのため、なにか役に立つための仕事をしたいと思っています。そのためにもわずかでもがんばらなければという意欲をもたせてもらっています。これからも子どもたちのために尊い愛の支援への手助けよろしくお願いいたします。　（49歳・女性・兵庫）

「あしながさん」になって感じたこと

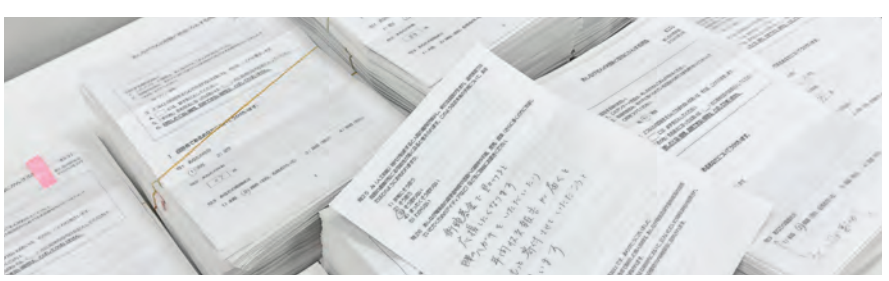
社会の助け合いが大事だと感じる	53.8%
人に知られず誰かの役に立てることがうれしい	53.2%
あしながさんを続けられることはありがたい	48.4%
あしながさんをやっていることを誇りに感じる	22.9%
人間的なつながりを実感する	12.8%
生活の中で楽しみがひとつ増えた	4.6%

息子が『助け合い』を学んでくれた

長男が就職するにあたりいろいろと話す機会があり、その中であしながさんを続けている親を陰ながら誇りに思っていたと聞きました。まったく意識していなかったので正直おどろきましたが、同時に少しうれしく思いました。長男は恵まれていますが、社会には様々な境遇の人たちがいて協力し合い、助け合いながら生きていくことの大切さを感じてくれたようです。これからも生涯続けられるよう、頑張っていきます。（52歳・男性・新潟）

「助け合い」について、あなたのお考えは？

私は周りの人たちに支えられてきたので、だれか別の人の支えになりたい	63.2%
私はとくに誰かに支えられてもらったわけではないが、誰かの支えになりたい	20.3%
私は周りの人たちに支えられてきたので、その相手の支えになりたい	6.8%
誰かの支えになりたいとはおもわない	0.7%



あしながさんの思いが詰まったアンケート回答

ボランティアや援助が「日常」にない日本

自分が助けていただいてから、もうじき30年たつところです。父が亡くなり、お先まっくらで夢をあきらめかけた時、あしながさんに助けられました。今では夢を現実にして幸せにしています。いつか私もあしながさんに…と思ってやっとここ数年、本当に少ないですが（教育費がかかる子どもが3人いるので）行うことができうれしいです。まだまだ日本では、ボランティアや援助というものが「日常」の中にまで入ってきていないと思います。もっと認知度が上がってほしいです。続けるってことは、本当に難しいですね。私にできることは小さいですが、できることを続けていきたいと思います。

（44歳・女性・神奈川）

「あしながさん」大調査

「後輩遺児を助ける街頭募金」賛成 83%

●「あしながさん」になったことに関係した経験がありますか？

奨学金や学費の支援を受けたこと	16.8%
大事な家族、親せき、友人と死別したこと	13.5%
貧しい家庭で育ったこと	11.1%
母子、父子家庭で育ったこと	8.0%
苦学したこと	6.0%
希望する学校にいけなかったこと	5.7%
大病、大ケガをしたこと	4.8%
大事な家族、親せき、友人が大病、大けがをしたこと	2.7%

父亡くし奨学金で進学

私があしながに参加したのは、中学２年生のときに父が病死し、父や母の知人が個人的に奨学金を募ってくださったことに元があります。日本育英会の奨学金も受けましたが、多くの方のおかげで４年制大学に進学し、教職に就きました。

私は「北風と太陽」の話が好きで、人は優しくされると心が温かくなり、人にも優しくなると信じています。収入が少なくなって、あまり寄付できませんが、少額、単発でもよければと思っています。

（70歳・女性・神奈川）

●奨学生らが毎年春秋に行っている街頭募金について

後に続く遺児を助けるのはよい	83.0%
奨学生が社会参加できてよい	45.2%
奨学生の勉強になってよい	26.1%
奨学生は募金をしなくてもよい	6.0%
わからない	5.4%

「応援してます」と声を掛けたい

街頭募金をする若者たちの姿を見て、支援することを始めました。年２回、いつ、どこでやっているか調べて出向いたりしていましたが、会えないことが増えたことからカード払いに変更しました。でも頑張っている人たちに一言「応援してます」と声を掛けたくて、運良く見掛けたときは、少額ですが募金しています。大変だとは思いますが、街頭募金は続けてもらいたいです。

（50代・男性）

●遺児の仲間づくりなどを目的とした「つどい」について

仲間づくりができるのでよい	78.4%
心のケアにつながるのでよい	78.1%
将来や人生のことを考えられる機会なのでよい	70.4%
つどいはしなくてもよい	0.8%
わからない	3.3%

奨学金のみならず心のケアも

私は豊かではないにしろ眠る場所と食べ物を両親から与えられ､そのことに何の疑問も感じていませんでした。しかし事故などで親を失い生活に困ったり、学ぶ機会すら失う子どもたちが多くいることを知りました。子どものいない私が、子どもたちが育ち、勉強する助けになればとささやかながらあしながさんを始めました。あしながさんの良いところは、奨学金のみならずレインボーハウスなど子どもの心のケアにも取り組んでいることです。

（51歳・女性・愛知）

●アフリカなど海外の遺児への支援活動について

現地の貧困問題の改善に役立つのでよい	52.8%
母国の将来に役立つ人材を育てるのでよい	42.9%
国際社会で活躍する人材を育てるのでよい	47.2%
海外遺児支援はなくてもよい	10.8%
わからない	10.3%

世界を見るあしながの存在

ふとしたきっかけで始めた援助ですが、次々と世界中で起きる災害を知るにつけ、止められなくなってしまいました。教育の必要性は感じますし、世界に目を向けるあしなが育英会の存在がますます大きくなってくるでしょう。

（73歳・女性・東京）

アンケートへのご協力と日頃の温かいご支援に心よりお礼申し上げます。

生きづらい人の力になりたい

東日本大震災で父を亡くし、世界を旅している久我理亜さん

東日本大震災の津波でお父さんを亡くした久我理亜（くが・りあ）さん（25）への本会職員によるインタビュー記事が、NHKホームページ・みんなでプラス「いま言葉にしたい気持ち～東日本大震災あの日から～」に掲載されました。久我さんは宮城県出身。自宅は内陸部で無事でしたが、父・正春さん（当時43歳）は沿岸部で仕事をしていて帰らぬ人となりました。彼女は震災後、あしなが育英会のケアプログラムに参加したあと、世界を旅しながら音楽や絵画の創作をしつつ、次の進学の準備をしています。記事の一部を再構成し紹介します。

◇

―震災から10年経ってお父さんへの気持ちに変化はある？

久我　14歳の時に震災があったので、お父さんについて知らないことが多い。でもそのときまで見ていた父親は、音楽と本と釣りが好きな人だったから、釣りに対するロマン、音楽に対するロマン、そして本を読むことの大切さは、父から学んでいる。追いかけてる部分があるかなと思います。

―お父さんを追いかけているのは、震災直後から、それとも時間がたってから。

久我　震災直後は何を考えていたのか、あんまり覚えてないんです。でも、震災後からお父さんのギターを弾き始めたので、直後から何となく追いかけていたのかもしれません。

―フランスにいるほうが「自由でいい」って言っていたよね。日本とどんな風に違うの？

久我　日本にいると25歳って、大学を卒業して、就職して、みんな働いていたりとか、道が大体決まっているじゃないですか。フランスは、人と違っていたりするのが当たり前で、違っていた方が面白いと思われる。日本だと好きな服も着れないし、友だちと社会問題を話せないとか、みんな殻に籠もっている感じがする。私も人に対して知らない間にバリアみたいなのができちゃうんです。私はこっちのほうが生きやすいです。

―すごくいきいきしている感じがする。

久我　音楽がきれいに聞こえたり、色がきれいに見えたり。絵を書いたり、詩を作ったりする上でも、こっちにいるほうが良い作品がつくれる感じです。

―作品作りはセルフケアでもあるのかな。

仙台レインボーハウスで歌う久我さん

あの日からの人生は父の贈り物

◀久我さんが大事にしている父の形見のギター

▲ベースを弾く父・正春さん。
手前の女の子が久我さん

久我　そうだと思います。お父さんのギターが家にあったり、小学校・中学校のとき、お父さんと一緒にコンサートに行ったりしていたので、音楽を聞くのがもともと好き。お父さんが亡くなってから、自分もギターで歌を作りたいなって思って、弾き始めました。

―以前、「お父さんとの死別なしに自分の人生をこんなにも愛せなかったと思う。それに気が付くたびに、お父さんとか亡くなった方々に罪悪感を抱きます」と言っていたよね。ところが、最近になって「全部お父さんからの贈り物だって思えるようになった」と話してくれたけど、変わっていくプロセスはどういうものだったんだろう。

久我　あまり明確なきっかけはないと思うんですけど、やっぱり「死」を受け入れたことですかね。死に対していつまでも悲しんでいたり、暗いイメージで引き込まれてしまったりすると、前に進めないじゃないですか。自分もいつかは死ぬっていうことをちゃんと理解したときに、死があることは悪い事じゃないと思えた。今あるものすべては、お父さんの死があったからこそだし、お父さんがたぶん残してくれたもの。人との関係とか自分の考え方とか、すべて贈り物なんだろうなって思えるようになったんです。

―「多様性を受け入れられるような居場所を作りたい」って聞いたけど。

久我　多様性もそうですけど、日本で暮らす生きづらい人、たとえば移民とか難民とか…そういう人たちの力になれたらいいかなと思います。日本の多くの人は、外国人に対してちょっと壁があるように思う。でも私にはもうない。そのぶん、近くでちょっとでも支えになりたいと思います。多様性とか人種差別について学びたい。そのため、社会学に関心を持っています。

NHKホームページ
いま言葉にしたい気持ち ～東日本大震災 あの日から～

前編　後編

久我さんの記事が掲載されています。
ぜひ、お読みください。

自作の「花のしおり」を手に（撮影時のみマスクを外しています）

京都すばる高校生と本会アフリカ遺児奨学生（以下「100年構想生」）の交流イベントが10月24日、京都市伏見区向島にある京都すばる高校で行われました。同校とは2019年から複数回、日本とアフリカの文化を紹介しあう特別授業や企画を合同で開催しています。今回は地元の「向島まつり」の出し物として、学生たちが一緒にオリジナルの「花のしおり」を作る様子をオンラインで配信しました。

京都志塾プロジェクト

アフリカと日本をつなぐ花言葉

京都すばる高校生が奨学生と交流イベント

しおりは「向島まつり」の来場者にも配布

しおり制作を企画・実行してくれたのは、同校企画科の2年生と1年生。日本の和紙や折り紙とアフリカ伝統のプリント布を切り貼りし、ドライフラワーを重ねてラミネート加工すると、個性豊かなしおりが完成しました。

素材として使ったガーベラには〈希望・前進〉、コスモスには〈調和〉という花言葉があります。「コロナに負けず、日本とアフリカの調和をめざしたいという思いを込めて企画を考えました」と説明してくれたのは、企画班の代表として参加した林大道さん（京都すばる高校2年）。

100年構想生のナルタヤ・レイチェルさん（立命館大学2年）は、「みんなと一緒に過ごせてとても楽しかった。作ったしおりは大切に使います」と笑顔で感想を語りました。

交流会終了後は参加者全員で、日本とアフリカの遺児のための教育施設・京都志塾の建設予定地である向島二の丸小学校跡地を見学。京都すばる高校企画科長の小川建治先生は「さまざまな制約がある中で、どんな形ならばイベントが成功するか考え続けた生徒たちを頼もしく思います。京都志塾の視察もできたので、今後は空間を生かしたアイデアも提案していきたいです」とコメント。若者同士の相互理解と、地域との連携を深めることのできた有意義な1日でした。

◆ あしながアフリカ遺児高等教育支援 100 年構想

サブサハラ・アフリカ地域 49 か国から優秀な遺児を選抜し、世界の大学に留学させるリーダーシップ・プログラム。各国から選抜された学生は「100 年構想生」と呼ばれ、将来アフリカへ戻り、母国の発展を担うリーダーとして活躍するという「志」を胸に学ぶ。本会は 100 年構想生が海外の大学で学ぶためのサポートだけでなく、彼らがリーダーシップスキルを磨く機会を提供する。2014 年のプログラム開始以降、現在までに 200 人以上の遺児が採用され、世界の大学に進学している。

◆ 京都志塾（きょうとこころざしじゅく）

向島二の丸小学校跡地

本会が開設計画を進めている日本とアフリカの遺児のための教育・宿泊施設。向島二の丸小学校（統廃合により2019年3月閉校）の跡地を利用する。施設の目的は、アフリカの遺児に祖国へ貢献する「志」と、大学で学ぶための基礎教養を身につけてもらうこと。関西圏の大学に通う、国内の遺児大学生のための寮「心塾」としても活用し、多文化共生の場となることをめざしている。

会長代行に 川村岩（いわお）氏

2019年以来あしながが育英会の理事を務めている川村岩氏が、今年9月30日の臨時理事会で会長代行に選任された。

川村氏は岩手県出身の63歳。交通遺児育英会の大学奨学金を利用して大学に通い、3年生のときに新規開塾した学生寮「心塾」に入寮、一期生として心身共に鍛えられた。大学卒業後は米国に留学してMBA（経営学修士）を取得。帰国後キッコーマン株式会社に入社。海外部門を中心に様々な経験を積み、今年6月に同社顧問に就任した。

◇

川村氏の就任により、本会の会長代行は樋口恵子氏、堀田力氏と併せて3人となった。

あゆみ

9月30日　第14回臨時理事会

10月19日　「長引くコロナの影響 高校奨学生保護者調査 2021」について、調査対象者への依頼状発送

11月1日　大学奨学生による高校奨学生保護者インタビューを開始

青い目の日本望見

クリストフ記者のこと

世界数十か国を飛び回り、貧困や飢えや人身売買を報じてきたニューヨーク・タイムズのニコラス・クリストフ記者（62）がオレゴン州知事選に出馬するため、ジャーナリストを辞めました。

十数年ぶりに生まれ故郷の小さな町に戻って知らされた事実にクリストフ記者は愕然としました。竹馬の友たちが世を儚（はかな）んで麻薬依存やアルコール中毒になり、自殺していたからです。

世界各地で苦しんでいる人たちの悲劇を取材、報道している最中、豊かなはずのアメリカ国内、しかも自分の郷里で悲劇が起こっていたのです。クリストフ記者は激しいショックを受けました。

「残りの人生を郷里のために尽くしたい。問題を摘出するのではなく解決したい」。政治の手練手管は知りません。でも社会正義を見つめる目は確かです。政治家にとっては絶対条件です。皆さんが総選挙で選んだ政治家たちもそうであってほしいものです。

あしなが運動の大恩人

副田義也（そえだ・よしや）名誉顧問

略歴　1934年東京生まれ。1959年東京大学大学院社会科学研究科修士課程修了。日本社会事業大学、東京女子大学を経て1977年筑波大学社会科学系教授。1995年同大学副学長、のち名誉教授。1999～2010年金城学院大学教授。1974年以来、あしなが運動の各種調査に継続的に関わった。2004年福祉社会学会創立、初代会長。

主な著書に『日本文化試論―ベネディクト“菊と刀”を読む』『あしなが運動と玉井義臣―歴史社会学的考察』『生活保護制度の社会史　増補版』などがある。

副田名誉顧問による主な調査

1974　交通遺児家庭の生活実態
1977　遺児家庭の母親の職業と生活
1984・1998・2011　あしながさんの生活と意見
1985　災害遺児家庭の生活実態
1994　病気遺児家庭の医療体験と生活実態
1995・1996・2000・2004　阪神大震災遺児家庭の生活実態追跡調査
1997　ガン遺児家庭の喪失体験
1999　自死遺児数推計
2011　東日本大震災「特別一時金申請書」の分析
2013　東日本大震災遺児家庭実態調査
2014　「あしながウガンダ」総合調査

副田名誉顧問が監修・寄稿・執筆した主な「あしなが運動」関連書籍

全国のガン遺児家族の喪失体験を主題にした調査を実施。副田教授は遺族の苦しみや悲しみ、怒りについて語った（1997年）

自然災害や労働災害によって親を亡くした遺児家庭の生活実態調査を実施。災害遺児の奨学金制度設立の大きな後押しになった（1987年）

交通遺児家庭を対象にした調査では「貧困、母親の健康破壊、遺児の進学の断念」など遺児家庭の困窮の事実を明らかにした（1977年）

研究者としての副田教授による「あしなが運動40年史」。玉井義臣とその周辺の人物像が、緻密な資料を中心に分析構成されている（2003年）

自死遺児の心の傷とケアに関する調査・研究を実施し、国内において初めて自死遺児の深刻な心の傷を浮き彫りにした（2002年）

阪神大震災遺児家庭に調査を実施し、遺児たちの心の傷や家族の変化などを聞き取った。レインボーハウス建設の礎のひとつ（1995年）

すべては調査から始まった　玉井 義臣

副田義也さんに調査をお願いしたのは、1970年度からだった。以来1年に1本、時には2本、3本という年もあった。

副田さんは調査学者として、超一流だった。

調査が始まると、副田さんとお弟子さんが5、6人で組んで議論を重ねる。授業はいつもサボっていた私にとっては、この調査の質問づくりの話し合いと教授と弟子たちのやりとりは、第二の大学であった。私も副田教授の弟子の一人と思っている。

調査は質問用紙によるアンケート、大学奨学生がやる面接調査、時には家計簿を対象とした調査もあった。発表時には新聞やテレビで大きく取り上げられた。遺児問題を通して、社会の暗部をくっきり切り取る業が見事だったからだ。調査が発表されると募金は急増した。

70歳を超えパーキンソン病を患った私が、アフリカの遺児支援のため、車イスに乗って欧米やアフリカへ協力者探しの旅を重ねていた時は、長年の戦友である副田さんも見かねたのであろう。同じくパーキンソン病を抱えながらアフリカ遺児調査への参加を申し出てくださった。

やはり「調査」だ。行政を動かすのは調査に勝るものはない。

私がこの信念を持つに至った「事件」は、1968年4月15日、テレビの大人気ワイドショーで起きた。父親を交通事故で亡くした10歳の中島穣君が自作の詩「天国にいるおとうさま」を朗読した。名物司会者の桂小金治師匠は号泣した。スタッフも皆泣いていた。

コメンテーターとしてレギュラー出演していた私は、その場にいた田中龍夫総理府総務長官（当時）に迫った。「交通遺児の全国調査をしてほしい」「わかった。やりましょう」。

権威ある機関が実態調査をすれば、あとは施策あるのみである。これで「勝った！」と思った。反響は各方面に広がり、翌1969年5月2日、財団法人交通遺児育英会が設立された。

▲2014年8月、アフリカ・ウガンダで遺児の調査を行った副田名誉顧問。保護者会に参加し、様々な訴えの声に耳を傾けた

遺児家庭調査 半世紀

副田義也（そえだよしや）名誉顧問（筑波大学名誉教授）を悼む

社会調査を通して半世紀にわたり遺児を支えてくださった社会学者の副田義也本会名誉顧問（筑波大学元副学長・名誉教授）が、10月8日夜、多臓器不全のため亡くなられました。享年86。ご葬儀は近親者で済ませておられます。来春、「偲ぶ会」開催の予定。詳細は後日、本会ホームページなどでお知らせいたします。副田名誉顧問による調査は、遺児が抱える貧困、教育格差などの問題は日本全体の課題であることを訴え、社会を動かしてきました。玉井義臣会長にとっては、遺児を支える「あしなが運動」の同志であり、生涯の盟友ともいえる方でした。本会の大恩人に対し、心よりの感謝と哀悼を表します（3面「共生」もお読みください）。

2011年1月に行った「あしながさん１万人調査」の記者発表に臨む副田名誉顧問（右）。左は玉井義臣本会会長（2011年3月7日東京本部）

本会が「心のケア」の必要性とボランティアの力を痛感した阪神・淡路大震災（１９９５年）。震災遺児調査チームを率いた副田名誉顧問の総括には、本会への熱い思いと期待が込められていました。私たちの活動の指針ともなるものであり、監修本「黒い虹」（廣済堂出版、１９９６年）より抜粋・改稿して掲載します。

◇

一九九五年八月、あしなが育英会はボランティア八百十二人を動員して、阪神・淡路大震災による震災遺児家庭二百四世帯の訪問調査を行った。その調査によってあきらかにされた震災遺児家庭の生活と心理の実態の報告が、震災遺児の作文とともに『黒い虹』の主要な内容となっている。私は、その調査を企画立案し、私が主宰する研究グループがそのデータの学術的分析を行っているが、本書はそのデータ自体の社会的意義を考えて一足先に発表するものである。そのようないきさつがあって、私は震災遺児作文集『黒い虹』全体の監修の役割を引き受けた。監修者として、『黒い虹』について三つの感想を記しておく。

第一は、本書であきらかにされる震災遺児家庭の真実の姿についてである。ここで、はじめて震災遺児家庭の親や子ども、親族などが、震災体験、親やきょうだいの死、残された家族の心の傷、現在の生活の苦しさなどを率直に、時に生々しく語っている。今回の大震災は、この半世紀の間で日本を襲った自然災害の代表例の一つであるが、その被災者の実態がほかで例がないほど多面的に示されている。それはステロタイプのマス・コミ報道によっては、けっして伝えられなかったものであった。われわれはこれを読んで、震災遺児家庭への経済的援助と心のケアの双方の必要性を認識するとともに、震災遺児家庭の残された家族が互いに支え合い、遺児達の少なからぬ者が不幸の体験をも心の糧として成長しつつあることに感動するのである。私はこれを読みながら、何度も人間は立派な存在だ、家族は良い集団だと思った。

＊

第二は、本書で報告される調査に参加し、働いたボランティアの意義についてである。この調査ではじめて震災遺児家庭は真実を語った。その主要な理由は二つあると思う。一つは、各家庭があしなが育英会にたいして持っていたそれまでの実績にもとづく信頼感である。これは次でふれる。いま一つは調査に従事したボランティアの主力があしなが育英会の大学奨学生で病気遺児、災害遺児であり、震災遺児家庭の人々と親を失った悲哀や苦悩を共通して持っていたことである。震災遺児家庭の親子は、訪れてきたボランティアが自分達と同じ経験をした人間であるのを知って、はじめて心を開く気持ちになったのだ。この人ならわかってくれると思ったのだろう。聞き手の遺児のボランティアも、その話からあらためて自らの親の苦労などを考え、学ぶところがあった。なお、この調査には全国から募集した一般学生のボランティアも参加したが、彼らにとってもこの調査の体験は大きい学習と成長の機会であった。

＊

第三は、本書で報告される調査を成し遂げたあしなが育英会の存在意義についてである。今回の大震災による震災遺児家庭にたいする社会的救援活動において、同会は常に先導的な役割を果たした。これまでの活動記録で具体的に紹介されているので詳しくはそちらで見てほしいが、震災遺児家庭を発見するためのローラー調査、遺児の心のケアのための訪問活動やつどい活動、震災遺児への奨学金特例措置や激励募金など、同会は必要な活動を適切な時期に次々と展開していった。これらの活動が、先に言った震災遺児家庭の同会にたいする信頼感を形成したのである。あしなが育英会がそれらの活動から今回の実態調査までを行うことができたのは、同会の中にこの三十年近く展開されてきた交通遺児、災害遺児、病気遺児の救済活動を通じて得られた運動のノウハウが蓄積されているからであろう。ボランティア活動への社会的注目が高まる中、あしなが育英会自体が日本社会の貴重な財産となっていると思う。

あしなが育英会は日本社会の貴重な財産

副田　義也

おとうさん

大阪府　木寺（きでら）正幸（まさゆき）さん　(42)

3人だけど気持ちは4人

「生まれかわっても妻と結婚したい」今年10月、神戸レインボーハウスで

▲息子さんの周りを温かい「お母さんの風」が包んだ

◀「妻もこの写真なら OK 出すかな」子どもたちの大好きなお母さん

2020年5月13日、その日は心地良い風が吹く日だった。享年41。最愛の妻であり子どもたちの母である佳織（かおる）さんが旅立った。

最期の「家族の時間」

佳織さんとは10年のお付き合いを経て結婚。娘と息子にも恵まれ、正幸さんは仕事に励んだ。今の子どもたちのベースを作ってくれたのは佳織さんだと思っている。

2018年に胃がんを発症。抗がん剤治療もしたが、コロナ禍となった20年春、家族で最期の時を家で過ごした。正幸さんは毎日の看護記録、点滴、注射、できることはすべて自ら行った。2週間ほとんど眠らなかった。

娘は「お母さん、産んでくれてありがとう」、息子は「僕のハーフ成人式に来れないの」と思いを伝えた。在宅看護のさなか、佳織さんは「これから先に生きていく中で、思い悩んで行きづまり、逃げようと考えたとしても、命を大切にしてほしい。自分を大切に生きて」と子どもたちに思いを託した。

「子どもの小さな靴下を干す時に幸せを感じる。毎日幸せすぎて怖い」。子どもが一番の愛情豊かなお母さん。「これからのあなたの判断は私の判断だから大丈夫」と正幸さんの不安に寄り添い、どこまでも家族の幸せを願った。現在小学6年生の娘、4年生の息子。運動会、キャンプ。ずっと一緒に、隣で子どもたちの成長を分かちあいたかった。

3人での生活

亡くなって1年は疲労困憊（ぱい）。「子どもがいなければもういいかな」と思う時もあったが、子どもたちのおかげで生きてこられた。夢で佳織さんに「子どもたちは成長しているから大丈夫よ」と言われ、頑張らねばとガチガチだった肩の力が少し抜けた。

育児と仕事の両立には悩むが、会社の仲間の理解に支えられ、食材の宅配も利用し、夕飯時の家族時間を大切にしている。「お母さんはこうしてたで」「そんなに塩かけたらお母さんに怒られるで～」とみんなで仏壇に顔を向ける。「3人だけど、こんな風に4人の時間を持って生きていけたらと思うんです」。

心を開放する場所

佳織さんが旅立った1か月後、レインボーハウスのリビングで「佳織」というサインが入った絵が目に入ってきた。「妻の導きかな」と思った。

ここに来ると子どもたちの眼が違う。自分の心も解放され、穏やかになる。同時に「どうしようもなく気分がふさぐ時もある。でもそうなって当然なことを経験している。それでいいと思っているんです」。他のお父さんたちにそう伝えたいと、今回の取材を引き受けてくださった。

木寺さん一家がレインボーハウスに来館される時、温かな風を感じる。佳織さんも一緒に訪れてくださっているのだろうか。レインボーハウスが、佳織さんが愛してこられた大切なご家族の伴走者であれたら、そう思う。

◇

（峰島里奈記者）

ホームページにも保護者インタビューを連載しています。

ご支援ありがとうございます。

みなさまの継続的なご寄付のおかげで私たちの活動が続いています

◆郵便局（ゆうちょ銀行）備え付けの青色の用紙でお振込みされる際は、こちらの口座番号をご利用ください。ご寄付の使いみちは次の 5 つからお選びいただけます。

1. 00140-1-541731　あしなが育英会
（あしなが育英会の活動全般に使わせていただきます）
2. 00180-0-15595　あしなが育英会あしながさん奨学金係
（国内遺児の奨学金として使わせていただきます）
3. 00140-6-98241　虹のかけはし会員
（国内遺児の心のケア活動に使わせていただきます）
4. 00130-7-776732　あしなが東日本大震災遺児支援募金
（東日本大震災遺児の支援に使わせていただきます）
5. 00150-3-734125　あしながアフリカ遺児教育支援
（アフリカ遺児の奨学金や教育支援に使わせていただきます）

◆ゆうちょ銀行以外の銀行やコンビニエンスストア、また、ウェブサイトからはクレジットカードと Pay-easy（ペイジー）もご利用いただけます。ゆうちょ銀行専用振込用紙やコンビニ振込用紙のご請求、銀行口座のご案内につきましては、寄付課までお気軽にご連絡ください。また、遺贈のご相談も承っております。

◆ お問い合わせ

フリーダイヤル（寄付課直通）
0120-916-602

Eメール
supporter@ashinaga.org

詳しくはウェブサイトをご覧ください
https://www.ashinaga.org/support/donation/